

29 高気圧酸素の併用で良好な治療効果が得られた脊髄硬膜外膿瘍の一例

合志清隆¹⁾ 溝口義人²⁾ 下河辺正行³⁾

- | |
|--|
| 1) 産業医科大学 脳神経外科・高気圧治療部
2) 健愛記念病院 外科
3) 戸畑共立病院 内科 |
|--|

【はじめに】多くの細菌感染症に対する高気圧酸素(HBO)治療の併用が効果的であることはよく知られている。今回われわれは脊髄硬膜外膿瘍で抗菌剤のみで改善がえられず、HBO治療の付加にて急速に膿瘍が縮小から消失した症例を経験したので報告する。

【症例】症例は他に合併疾患を有していない49歳の男性で、転落にて頸部を打撲したが打撲痛は改善していた。しかし、打撲から3ヶ月後に発熱を伴い、左の後頸部痛を自覚するようになった。髄膜炎の診断で治療をされたが、改善せず入院治療となった。CT検査では頭部に異常はなく、頸部の皮下組織に広範な腫脹を認めた。抗菌剤による治療を続けるも症状は改善せず脊髄症状もみられたことから、頸部MRIを施行するとC4からC7のレベルで頸髄の前面に周囲が造影される圧迫性病変が認められた。頸部硬膜外膿瘍の診断で、使用薬剤は変更せずにHBO治療を付加した。この併用治療を3日間行なったところ、頸部痛の軽減と血液生化学的所見の改善が得られ、13日後には上肢の運動・感覚障害は消失し、血液生化学的検査も正常化しており、同日の頸部MRIでは膿瘍の顕著な縮小が得られていた。退院後は抗菌剤の内服とHBO治療の併用を5週間続けたが、それから6ヶ月以上の経過観察で膿瘍の再発は認めていない。

【考察】この疾患の通常の治療は観血的なドレナージ術に抗菌剤を加えることであるが、早期診断が可能な現在でも12~20%の死亡率である。薬剤耐性の起因菌が高率であることに加え、椎体骨の骨髓炎を合併していることが、治療予後に大きく影響している。この疾患の治療にはHBO治療を早期から併用することが重要であると考えられる。

30 骨肉腫細胞に対する高気圧酸素治療と抗癌剤の効果についての検討

川添泰臣¹⁾ 横内雅博¹⁾ 岩谷博明²⁾ 小宮節郎¹⁾

- | |
|---|
| 1) 鹿児島大学大学院運動機能修復学講座整形外科学
2) 鹿児島大学医学部・歯学部付属病院救急部 |
|---|

【目的】骨肉腫は骨原発性悪性腫瘍の中では最も多く、以前は最も予後の悪い腫瘍とされ、その五年生存率は15%から20%であった。近年は画像診断や手術手技、術前、術後に行う化学療法が発達により5年生存率は50%から70%にまで向上している。しかしながら診断時に肺転移のあるものや化学療法の副作用により治療が進まない症例については現在も予後不良である。一方、他の悪性腫瘍の治療においては、化学療法に高気圧酸素治療(HBO)を併用することで単独治療より効果的な治療成績が得られた例が報告されている。今回、我々は骨原発腫瘍にも化学療法と高気圧酸素治療の併用効果が期待できるかどうかin vitroでの実験結果を踏まえ報告する。

【方法】LM-8(マウス由来の骨肉腫細胞)とHOS(ヒト由来の骨肉腫細胞)2種類のcell lineにAdriacin(ADM)とCisplatin(CDDP)をそれぞれ単独投与し、その単独効果とHBO併用効果をMTT法による生細胞数で比較した。

【結果】HBO単独での抗腫瘍効果は軽微であった。ADM群ではHBO併用による抗腫瘍効果の差はそれほどみられなかった。CDDP群ではその差が認められ、HBOの併用により生細胞数はより減少していた。これらの結果をふまえ、現在HBOを行うprotocolの検討や抗癌剤を組み合わせ投与する方法で治療効果を評価している。今後は上記以外の抗癌剤を用いた場合や、投与した抗癌剤の細胞内濃度を測定することで治療効果を評価する予定である。